犀川上流，二又・倉谷地区にみられたニホンザル伝承の特色

——捕食・薬用の生活史——

広　瀬　　鎮　日本モンキーセンター

ON THE CHARACTERISTICS OF JAPANESE MONKEY-LORE FOUND IN FUTAMATA AND KURATANI VILLAGES AT THE SAIGAWA RIVER (LIFE HISTORY OF MAN WITH MONKEY CAPTURINGS AND MEDICAL USES)

Shizumu HIROSE, *Japan Monkey Centre*

I　はじめに—犀川上流域伝承の現代化と情報提供者（インフォーマント）にみられた動物観

本論は，ニホンザルという生きものに関して，地域住民が長年の間どのような動物として理解してきたかをめぐって石川県下白山山麓の北東部旧犀川村二又と倉谷地区の住民からの聞きとりを中心に民間伝承にひそむ，ニホンザルをめぐる動物観の特色を自然環境および地域社会の特殊性にもとづいて明らかにする。同地区の情報提供者（インフォーマント）たちは，二又・倉谷の廃村後は，金沢市内在住の者である。本論では記号名とした。

今日残されているニホンザルをめぐる伝承のもつ文化価値性を過去から現在にいたるニホンザルに関する地域住民の動物観の変遷のうちにとらえることは，今後とも調査に多くの時間が必要とされているのであるが，「白山山麓の今」を的確に，この分野で今こそ記録しておく必要があるものと考えている。ニホンザルの自然適応，とくにニホンザルが自然環境のなかで如何に生活しているかを，サルの生息する地域にすむ住民がどのような興味をもって，如何にサルという動物を認識してきているかについては，特に関心のもたれることであるが，継続的な地域毎の調査活動と比較研究が進められてきたことから次第に過去の経過が明らかとなりつつある。ニホンザルやその他生物をめぐって，自然に対する野生生物の行動に関する深い関心を山村住民が有してきたことは，1976年中宮，尾添地区の調査においてもすでに明らかとなってきた（広瀬，1976 a）。ニホンザルと天候変化にかかわる民間伝承に限ってみれば，雨，雪，風，嵐に関するものが全国的に多く伝えられている。全国的にみて，雨に関するものが数多く収録されているなかにあって，石川県下白山山麓地区では，雪や雨，そしてくもりなどの諸現象に関したものが近年収録され，雷に関するものまでが聴取されるにいたっている。しかも，ニホンザルが自然現象をあらかじめ予知しうる能力をもっていると考えているものは，1977年に試みたニホンザル気象予知能力調査アンケートにみられる回答者40名中の半数以上の23名であり，また，はっきりとニホンザルには予知能力なしと断定しているものがわずか2名であった。「不明や答えなし」は，あわせて15名あり，回答者数の半数に達していない。興味あることにサルに自然予知の能力があるかどうかについては，「不明」としたり，また解答のなかったものが，70才代の4名の

高令者層に現われている点には注目したいのである。もちろんこれらは必ずしも充分な資料とはいいえない。ニホンザル自体の自然予知の能力の存在については，人々は，「サルの野生本能にある」とする認め方や，「サルは皮膚で，湿度や，温度を感じている」と理解しているものが大半を占めていた。このアンケート調査は少数の解答例であり，結論的考察にはもちろんいまだいたらないのであるが，ニホンザルの自然生活に対する一般人の関心の一端を示しているものと考えている（広瀬，1978 a）。そしてニホンザルの自然生活に関する一般人の関心は高く，とくに白山山麓地域住民の認識は現在収録されつつある諸口承で検討する限り年令層により，かなりことなり，その巾もひろいと云えるのである。サルの特殊行動としての雪中ラッセル行動や，みはり，移動の行動に関する口承の収録によって，次第にサルが自然環境にどのように対応した生活をしていたかが明らかとなったし，住民間の伝承に現われた動物認識の実態が本論の調査対象地域である二又・倉谷地区の場合は他の地区とことなり，著しく自然環境に関連して把握されている点が聞き込みによって明らかになってきたのである。雪・なだれ・雨・風・台風等に対応してくらしたニホンザルの動きにも絶えず深い関心を示した住民たちの伝統的な関心度や，認識度の相違が地区別に収録された民間伝承のうちに見い出せたのである。とくに，急激な社会の構造変化をもたらした昭和30年（1955）後半の我国高度経済成長政策や，国内道路開発，第1次産業の減少，観光レジアー産業の進展にともなう土地および道路の急速な開発が著しいが，環白山山麓帯，犀川上流の二又・倉谷地区に関しては，電源開発にともなう貯水ダム工事の大規模進展による水没地帯家屋集落の廃村をみた場所であった。

白山山麓帯では，これ等の地区以外にも地方住民社会の過疎化現象が次々と伝承の消滅をもたらし，同時に生活文化財の消滅をもたらしたのであり人々の伝統的な物質価値観や自然観に著しい変化がもたらされた（広瀬，1978 a）。

現在，急激な住民生活の現代化と物質価値の変化が，白山山麓帯においてどのように現われてきているかは詳細な調査が進んでいないが，しかしながらかつての人々の生活域に出没をみたニホンザルに対してどの様な感じ方が住民たちによってなされてきたかは少しずつ明らかとなってきたのである。同時に，自然環境に依存して生きる各生物層の生活域とくにニホンザルの生息域におよぼしたダム工事により引きおこされた影響は大きいと考えられるが，本論でとりあげた二又，倉谷地区では，大正期から昭和期にかけて急激にサルがみられなくなった地帯と考えられているのであるが，インフォーマントの提供情報によっても，昭和30年（1955）代よりニホンザルの生息に大きな変化がみられていたと考えられる。このようなニホンザル生息域への環境破壊による人工圧は，森林開発とならんで日本列島においては古くは，サル狩猟という形態での狩猟圧がサルのポピュレーション減少の一つの作用として働いているのである。昭和30年（1955）年代に全国の各地に開設され，餌付けされたニホンザルのムレを対象として野猿公苑が開設され，地方住民にとって，ニホンザルとのよりあらたな接近態度が出現するにいたった。そしてこのニホンザルをペット化し新しい動物観自然観の形成へとそれが働いて行く点は，注目されねばならないのであろう。本論にてとりあげた口承収録を行なった犀川上流地帯の二又・倉谷地区出身のインフォーマントたちは明治末年から，現在にいたる60余年間に及ぶ地域社会における生活を通じて接したニホンザルについて，生活価値観の現代化と共に独特な動物観の形成をみてきたのであった。

同地区でのインフォーマントからの聞込みは昭和51年（1976）6月26・27日，同51年10月30日金沢市において，松山利夫（国立民族学博物館），水野昭憲（白山自然保護センター）；山本重孝（石川県石川郡吉野谷村）の3名が出席のうえ行なった。なお環白山山麓帯のニホンザル民間伝承の調査は1971年より，白山自然保護センター調査研究委員会人文班により開始されている。

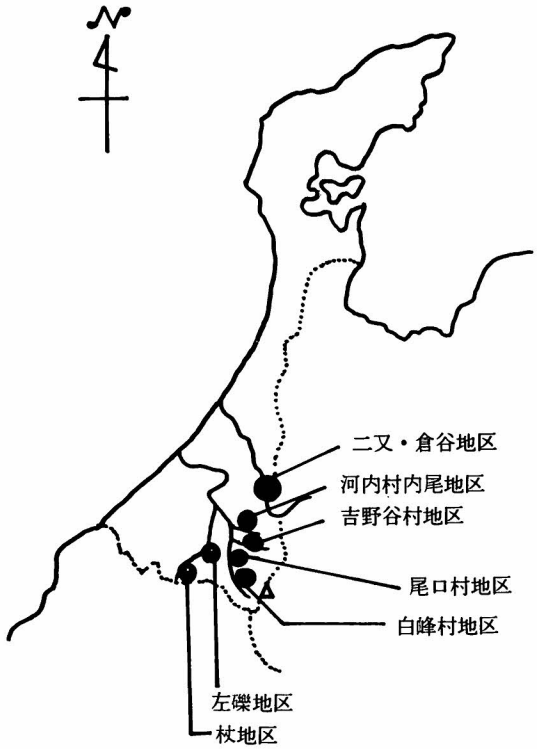

図1　調査地図　石川県下白山麓

II　聞き取りおよび伝承にみられたニホンザルの生息分布

1971年にはじまる石川県下白山山麓帯のニホンザルの民間伝承の収録によれば，かつて狩猟・出作り，炭焼き他の山間・農耕・山林業経験を有し，野生ニホンザルとの何らかの形で接触を体験したインフォーマントたちには，各種動物の行動に関しての多くの知識の蓄積がみうけられている（広瀬・水野，1975）。本論では，二又・倉谷地区出身のインフォーマントによるニホンザルの民間伝承にかかわる提供情報にもとづいて犀川上流・二又および倉谷地区におけるニホンザルの生息とその行動についての知識および知見にみられた特色ある話題を列挙し考察する。聞き取りは，テープレコーダーを使用しテープは資料として保存されている。

まず，二又・倉谷地区におけるニホンザルの昭和初期からの生息状況について，インフォーマントＹＳ氏およびＨ氏による口承をとりあげる。この両者によれば，もともと，犀川上流二又川流域の崖ふちは，サルの生息にもってこいであり，すなわち人間が近寄ることができず，雨よけに適し，雪のつもるところがなく，サルの生息地として絶好の場所であると両者が共々に指摘している。ニホンザル生息地域や地形に関する彼等のこの指摘は，ニホンザルの自然生活にかかわった地形利用についての知識度の高いことを示しているといわねばならないのであろう。

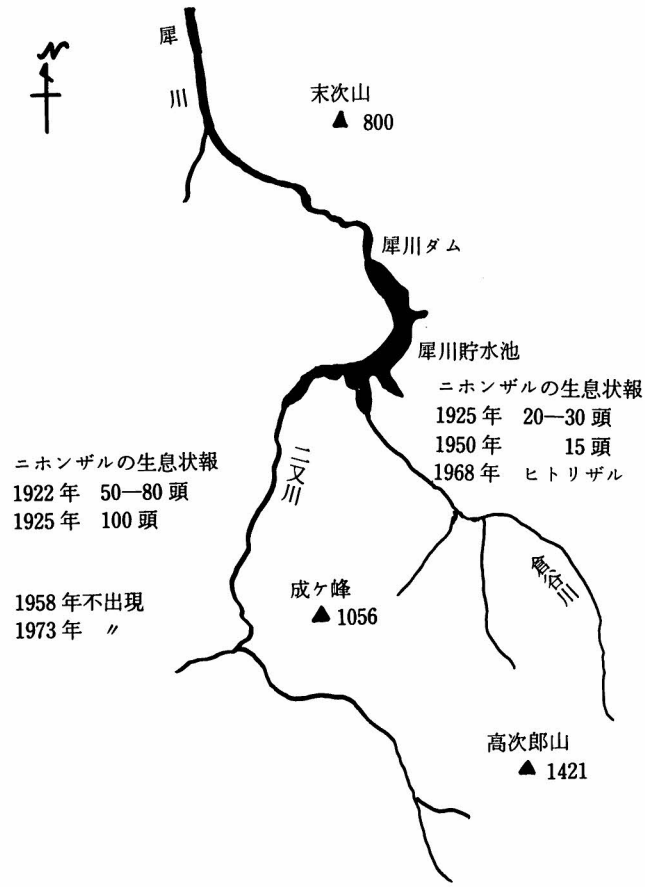

図2　二又川・倉谷川上流域ニホンザルの生息状報

また，彼等は同地区に生息するサルは石川郡吉野谷村または中宮・瀬波地区から移動してくるのだと考えていた。以下に同地区のニホンザルの生息状況をインフォーマントの情報にもとづいて明らかにする。

大正11年（1922）頃二又の村落の周辺にはニホンザルのムレは50～80頭いた。そして，同時期ムレは2群いた。これ等のムレは大正15年（1926）までに二又地区村落の周辺部に出現した。ＹＳ氏の口述によるニホンザル出没の情報をＨ氏もこれを認めている。しかしサルの生息数には両者の間にちがいをみうける。大正6年（1917）生れのＨ氏はサル出現の当時9才であったが，現在の二又ダムから4 km 上流域に二又川側に100頭，倉谷に20～30頭のムレがいたとのべている。両インフォーマントの記憶によれば，その後のサルは昭和25年（1950）まで同地区にはサルがみられない。昭和25年の二又地区のサルの捕獲事件が記憶されており実に10年ぶりであったという。長期にわたるサルのムレの不在の理由は不明である。

さらに，昭和33年（1958）頃には，再びサルが捕獲されていると伝えられているが，それ以後昭和48年（1973）まで姿がみられない。このようなインフォーマントの提供情報が明らかにしている点は，ニホンザルのムレがある年数，それとも10年ぐらいの間隔をあけて，ばったり姿をみせなくなってしまうことが，インフォーマントたちによって認められていることである。と同時に，このようなニホ

ンザルの動向がインフォーマントに注意されていて記憶にあるということは興味ふかいことといえよう。一体なぜこのような事態が起るかという問に対して，H氏は，「なわばり争いが原因である」と答えている。H氏によると，「ムレは7～8頭巻いてとると直海谷川沿いの河内村へ移動してしまい，それ以後サルは二又地区へはこなくなると認識していた。更に捕獲後のサルの急な移動についてイン

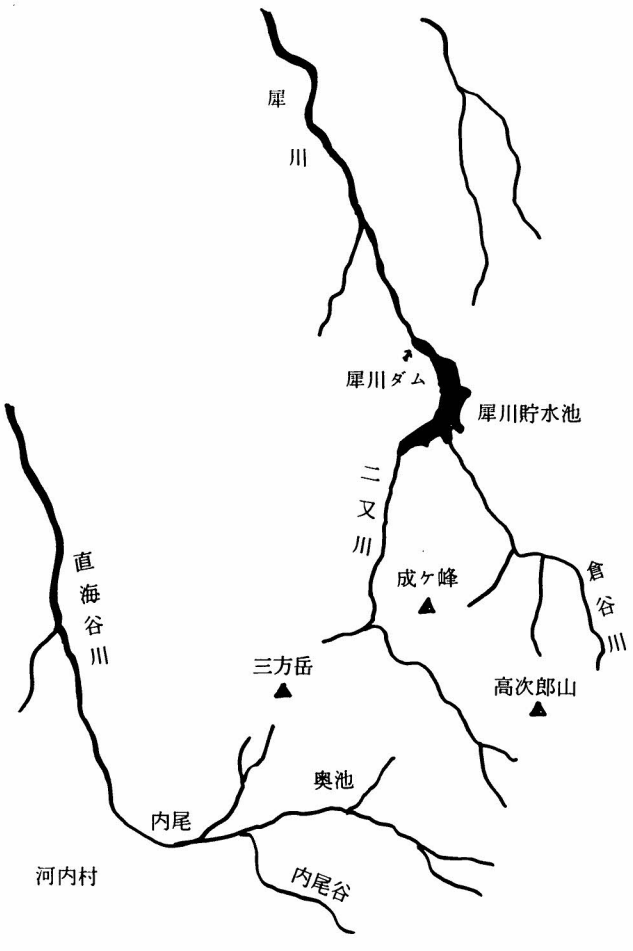

図3　ニホンザル伝承収録地域　犀川上流と直海谷川流域図

フォーマントたちはかなり正確に記憶しており，ニホンザルの自然環境利用をめぐっての環境変化の調査と共に今後，この種サルの過去における生息情報資料は，環境変化と動物生息状況の相関性を古伝承と関連して追跡可能にすると考えている。サルの季節移動に関しては，「サルは寒のうちは動かない」と考えられており，「ムレからムレへとサルは入りこめない」と考えていたことも明らかとなった。今日，進めている白山山麓帯の各地区毎のニホンザルに関する伝承の比較によると，確かに特定地区における住民の自然観および，動物観には差異がみられる（広瀬・水野，1973）。例をあげれば，直海谷川に沿った石川県石川郡河内村内尾地区は驚くべきことに白山麓の他の地区に比してサルに関する伝承伝播の巾が極めて広いと考えざるをえない（広瀬，1976 a）。しかしながらすでに明治37年（1904）頃から内尾地区はサルがこなくなってしまった地帯であって，現在も全く野生のニホンザル

が見られない。しかもこの地区の住民にとってサルの肉食の体験ももたない。これにくらべて瀬波川にそった瀬波地区にはニホンザルの捕食の体験談が住民層の間で聴取できたのである。

以上二又・倉谷地区にニホンザルをめぐる民間伝承の収録に際して入手しえたインフォーマントからの情報によって昭和38年（7963）電源開発ダム工事により廃村となった二又・倉谷地区におけるニホンザルの生息状況についてインフォーマントからの若干の知見を収録しえたのであるが，同地区住民にとってはニホンザルの出現が予期以上に人々の日常生活の話題となっていたと考えられるのである。

過去から現代に伝えられた根強いニホンザルに関する伝承には時間空間をこえた自然・動物観をみい出すが，現在のインフォーマントたちの口から語られる口承には，ニホンザルの自然生活にかかわる観察の上にたった認識が，独特の動物観を形成している点に注目したいと考えている。

III　情報提供者（インフォーマント）の伝えるニホンザルの行動

インフォーマントによる提供情報のなかで，ニホンザルと日本人のかかわりをめぐっての意識をみると次に問題となるのは地域住民たちがいかにニホンザルの姿や形そしてその行動を観察し，ニホンザルという生物に関する知識を得ているか，それがいかなる価値を有しているかという点であろう。昭和51年（1976）10月30日，金沢市内においてＹＡ氏，Ｈ氏，ＹＳ氏の3名のインフォーマントから二又ダム工事完成の昭和39年（1964）以前，（同氏等は，昭和38年（1963）から二又を離村した。）のニホンザルとの接触体験について聞き込みを行なったのであるが，以下にサルの行動に関する収録情報をとりあげてみる。まず，ＹＡ氏によれば，炭焼きのため夜道，山中をタイマツをともして行くとサルが木の上から，「カカ」と鳴く。同氏はその声を記憶しており，その他に「サルは目がよく効く，霞の中を三里みとおす」と云う。「ミハリザルは，木に登っており2匹いた」また，「後向きに子ザルが母親の背に乗る。また前の方へ子ザルたちが，親ザルの顔をとびこえて行く。」といった自然生活のなかのサルの行動を観察しており，それをよく記憶していた。また，「サルはけものののなかでただひとりさびしがる動物である」点を力説した。サルに関する関心のひろさも知ることができたが，次に，Ｓ氏によると，倉谷地区は昭和25年（1950）頃にはサルが見うけられ，ダムのそばで15　発見した。同氏の推量では中宮からやってきたと考えられていた。同氏も他のインフォーマント同様にサルの生息環境や土地利用については強い関心を示していた。またＹＳ氏はニホンザルの行動に関して，「ボスは大きいオスであり，行列のあとに残るサルは2番ボスである」，「ボスはヌキ（ムレ）の先頭をきる。」等，ニホンザルの自然生活にみられた生態行動の一部についての知見を有していた。また，出作り農耕の場におけるサルの行動に関しては，サルがソバの実を両手でこすり次に口で吹いて皮を吹きとばして食べたこと，又サルがとくに女と子供をおどろかせたことが印象にのこっているという。このように人々の出作り生活の場に出没したサルのことが意外にくわしく観察されていたことは驚きであったが，インフォーマントたちは，出作り耕作と炭焼きの実体験を有しており，村から5～6 km の所で、ソバ，アズキ等をつくっていたのであるが，サルはこの畠にしばしば出没したのであった。ニホンザルの季節移動ともかかわった口承については二又で，「サルが村へ近づく時は山の食物が少ない」また，倉谷では，「サルが里へ近づけば雪が多い」，「サルウジが湧くと初雪が早い」という云い伝えが伝えられており，また昭和51年（1976）10月にはサルウジが，金沢市内兼六公園において発生して話題となっていた。

しかし，なぜサルウジが降雪と関連があるかは誰も知らない。次にサルたちの山での食物に関した口承では，サルはフジマメを好み。サヤを割ってマメを食する。寒くなると雪中におちたものまで食

べる。サルはこの実のなったところに集まっている。サルにとってこのフジマメは，一番栄養になる」というように特定のサルの食物に関しても関心が寄せられていた。ＹＡ氏は父親からの聞き伝えによって，「サルにはナワバリがある」と考えていたが，前述のＨ氏も野猿の生態行動に強い関心を有していて，「倉谷では，サル追いに火縄銃を用い交替でサルをおどしたり，カカシも使用した。またサルは女・子供をばかにし，女一人だとサルが２―３匹木に登って枝を押しつけたりしておどすようなこともあった。サルにおどされた婦人も沢山いた。また出作り畠でのサル追いには木の枝を投げたくらいでは駄目であり，石油罐を叩いておいはらった」等住民とサルの接触についての情報が収録できたのである。

インフォーマントのニホンザルの行動に関する記憶はかなり具体的なものが多く含まれているが，これは，彼等とサルとの接触が狩猟とか，サル追いとの関連において深かったことを物語るといわざるをえないのである。従来，この種口承が保存され記録されることがなかっただけにインフォーマントの発言内容の検討をさらに進めたいと考える。

二又・倉谷地区においても住民の生活にはサルがかなりやっかいな生きものであったが，サル捕獲方法やそのための特別な道具等の発達はみられなかった。白山山麓地域全体を通じてもニホンザルの生態行動を見やぶった上でのサル捕獲や退治の諸用具類の開発が少ない。これは狩猟を対象としたサル以外の生物との住民の生活のかかわり方，生業との関連の違いを示すものといえよう。

Ⅳ　捕食・薬用の生活史

環白山山麓帯の住民層は，自然環境に対しての各種の働きかけをその生活の場において試みてきた。動植物の生業への摂取もその例であるが，出作り耕作地ではニホンザルの農作物に対しての接近に対してはこれを追い払い，害獣とみなしたサル退治が試みられてきた。鳥獣保護法施行後におけるニホンザルの捕獲は禁止されてきたがサルの肉の食用や薬用に関しての古くからの伝承が収録された（広瀬・水野，1973）。

ニホンザルをとらえ食用にする。あるいは，サルの体の一部を薬用とするという習慣は，これらはいずれも古くから我国において行なわれていたにもかかわらず，その人々の日常生活のなかでの捕食や薬用利用の具体的内容が正確に伝わることなく消滅の危機に遭遇していたのであるが，幸い，二又地区の開き込み調査によりかつてのニホンザル捕食についての実態が明らかになった。環白山山麓帯のニホンザル捕食をめぐっては，二又地区をのぞいては，すでに1976年，1977年の調査において，大日川添いの左礫，尾添川添い中宮，瀬波川沿いの瀬波の各村落において体験談を聴取することができたが，二又地区の場合は，隣接村落において全く捕食を行なっておらず，きわだった地域的な差異が見うけられたのである。その背景となる二又・倉谷地区ではイノシシ猟に関してはサルという言葉の使用をめぐって禁忌が働き，「サル」という言葉の使用をさけたが，村民たちのサル打ちに関してはタブーが働かなかった。これはサル打ちが一種のスポーツであり，レクリエーションであって生業とはみなされていなかったからである。ニホンザルの捕獲が法律で禁止されたこともあって，これまでサルの捕殺，肉食をめぐっての話題は人々の口にのぼりにくいものであった*。

二又地区での捕食の場合には，捕殺したサルの肉が美味であるという伝承が伝わるとともに食用・味付けについての記憶も残されていた。しかしながらサルの肉というものに対するインフォーマントの感情は復雑であり，サルの肉を切りとる時，サルの目に雪をのせて，サルの目と合わないようにした。これはサル肉の食用に，かかわる気持の上での抵抗感の片鱗を示しているものといえよう。口承

* 鳥獣保護及狩猟に関する法律（大正７年４月４日法律第32号，昭和35年６月20日法律第76号改正）

によればサル肉は切りとって竹串にさして焼いて食べ，食べないところは捨て去った。二又地区では，鉄砲以外のサルの捕獲方法としてトラバサミが使われたのであるが，本論では伝承化した倉谷地区でのサルの捕殺例をあげ考察を試みる。

すでに，犀川上流倉谷月ヶ原においてのサル狩りについては尾崎義雄氏談が記録されている（尾崎，1973）。これによると出作り村民は全村あげてサル退治を行なってきたのであるが，サル退治は畠作害獣対策としてやむをえぬことであり，マキ狩り方式で，サルを追いつめヤリでつき殺したのである。この方法は決して特殊な狩猟法とはいえず，東北地方やその他の地方でも試みられてきた（千葉，1969 b）。もともと白山麓は本業としてのサル狩猟が形成されず多くは，むしろゲーム・レクリェーションとしてのものであったが，倉谷の場合は害獣としてこれを追ったのである。果して仏教信仰上の禁忌がニホンザルの生息をどれほど保証しえたか不明であるが，犀川上流域倉谷地区の例のごとく住民にとっては，死活の問題としてサル狩りを試みざるをえなかったのである。彼等はサルを殺してもそれを放置し，何一つ利用することはなく，サルの霊が山へ戻るものと信じていたということであり，かつ人々もサル殺しを心中とてもいやがっていた。仏教を信じているものは，酒や金を出して，サル狩りに加わらなかったと伝えられている。

ところが，このようなサル捕殺の拒否が，白山山麓域全体にひろがっていたとは云えないのであり，サル狩猟に対する考え方は，地区的な差異が存在していた。倉谷地区では，特にサルの霊が死後山へ戻ると信じられていたという点には興味がもたれる。もともとサルに関した文芸・芸能への都会文化的モチーフの展開に乏しかった倉谷の地において，かつて日吉社がまつられ，日吉の使いがサルであったことも留意すべき点であろう。インフォーマントたちの少年期においてはサル打ちは一種のレクリェーション的なものとなっていた。サル打ちを避けた感情に対して対照的なサル打ちの娯楽性についてＹＡ氏はとりたてて娯楽施設のない村民にとって，サル打ちは一つの楽しみであったと云う。二又・倉谷両地区には専門的なサル打ちは勿論存在していなかったし，サルは猟の対象獣ではなかった。ＹＡ氏の子供の頃はヤリを使用していたが，大正時代初期に村には火縄銃が一本ぐらいしかなかった。二又ではサル打ちには15～６人は集まったが，当時家屋は20軒あり，多い家で一軒から３人ぐらい出てきた。弁当と２～３食を用意して出掛けた。22～３人で８頭ほどサルが捕獲したこともあったが，カンジキをかけて歩くので参加者は皆足の丈夫な者であった。明日天気だと思えば子供に触れてまわらせた。「明日サル取りに行くぞ」と触れてあるいたが，皆大変意気があがり，サル打ちには年２－３回はでかけた。イヌを連れて行ったがイヌで追うとサルは木に登り，追いつめて大きな穴へ入りこむと高い所にひっついてしまうので，それをとらえた。捕えたサルは村へつれてかえって，煙草をすわせて遊んだこともあった。捕殺したサルは鉄棒にさげておいたが，手ぬぐいでほほかぶりをして，誰かに似ているといっては遊んだ。Ｈ氏によれば，寒中のサルは鉄砲を打ってもムレが移って行こうとしないと述べているが，捕食については，サル肉は，村民のなかにも好き嫌いがあり，年寄った連中などのなかには10年ぶりだと云って肉をたべにやってくるものもいた。２月にとったサルはうまくない。１匹を15～６人で食べたが，黄色のきれいなあぶらをしている。食べ方は，なべに水をいれ，ふっとうさせ，そこへ肉をいれ，さらに煮立てて醤油と砂糖を同時にいれて味つける。マメをつぶしていれた。とくに汁気の多いものではなかった。サル１匹の肉は１人で食べても１週間はかからない。ウサギ３羽分ぐらいはあった。二又ではサルをたべるためのサル打ちではなかったので，いいところだけを食べてあとは捨てた。クマの場合と全く異なっている。肩に肉が少ない。サル骨はスープにしない。頭はそのまま残し，サルの脳は食べなかった。このようにＨ氏は，サル肉の食べ方について述べたが，やはり気持の良いものではなかったことを付言していた。以上のように二又では，極めて限られた時期のサルの肉食についての具体的な聞き込みができた。同地域には多賀社が地域内に祀られてい

たという。サル肉の味についての口承を収録してみると，インフォーマントによってもさまざまである。H氏によると，サル肉は美味で，寒の時はとくにうまく，焼いて食うか煮てくうかであり，とくに寒のうちの肉はくさ味がない。背中のあたりの肉は固い。肉は味曾煮にはしないこと等が述べられた。ここで注目しなければならないのは，サルをつかまえに行くことがおもしろかったし，サル捕獲がおもしろかったのも集団で行なったからであったとしている点等には，興味がもたれる。千葉徳爾は集団狩猟によるサル捕獲が，東北地方において活発に行なわれたのに対比して，西南日本ではいち早く集団狩猟方式が解体し，サルの捕殺が早い時期で消滅したことをのべているが（千葉，1975）中部山岳地帯においてサル打ちが近代においてゲーム化して行なわれていたこと，これによる狩猟圧がどのようにニホンザルの生息域に影響を与えたかについて今後の調査が必要となってきたといえよう。サルの肉食に限らず，薬用についても，今日その具体的な利用方法についての報告は少ない現状である。

ニホンザル薬用についてはすでに過去の伝承となりつつあるが（広瀬，1972），さかのぼってその薬用効果をめぐる口承を特定の地域社会において収録してみると，民間伝承にあらわれたサルの薬用慣習には古来から伝えられている使用法が今日でもいくつか見出される。日本において異常とも思われるほどの人気を博したサルの頭の黒焼きや，乾燥したサルの小腸の薬としての利用法については従来から漢方書はその効用について処法ならびに薬用効果を詳しく記述している（広瀬，1976）。それらの使用例をめぐって地方的な比較を試みてみると，地域間に必ずしもすべての点で一致がみられるとはいえない。ニホンザル薬用については，二又・倉谷地区出身のインフォーマントは，サルの頭の黒焼を使用する以外の利用方法について多くの知識を有してはいなかったのであるが，黒焼の使用法に

図4　ニホンザル薬用伝承と漢方との比較

地区名	効用	頭	猿骨	胃	腸	胆	脳	肉	生血	胎児	睾丸	尿	手筋	皮膚	計
白山麓地区	効用	頭痛 脳病 婦人病		馬胃病	安産	腹痛		テンカン							
	例数	3		1	1	1		1							7
長野県伊那地区	効用	喘息 肺病 梅毒 血の道 頭痛		胃痛 腹痛		腹痛 安産	結核 梅毒		産後	安産 血の道	結核 梅毒				
	例数	5		2		2	2		1	2	2				16
漢方・民間薬用法	効用	神経衰弱 頭痛 脳膜炎 脳病 婦人病 血の道 梅毒 狂病	黄疸 関節炎 マラリヤ 強性剤			胃カタル 解熱 胃病 眼病 消可不 良血 産後 の道 心蔵病	脳病	瘴疫 疫病 咳 百人咳 風労 中風 マラリヤ テンカン 病癖		子宮病 血の道		瘡疥 クモロ 咬まれ	小児驚癇 口喋	馬疫	
	例数	8	4			7	1	9		2		2	2	1	36

は特色がみられた。ＹＡ氏によれば，「サルの頭は脳の悪いものに効く。子供にサルの頭をのませた。頭は一つ，そっくりのまないと効かないとされている。サルの胃も薬として大切にした。胃は湯につけて使用する。サルの頭は欲しがられ，よけいに金をやるから，ゆずって欲しいともちかけられることがしばしばあった。頭の黒焼は，スリ鉢ですって粉にして，炭の粉のようになったものをジロアメ（水飴）にまぜてたべた」ＹＡ氏のサル薬用の云い伝えや，実際的使用法も今日では全くすたれ，忘れ去られている。ニホンザルの捕獲が禁止され，保護獣としての存在が熟知されるにいたるとますます古来の薬用も失なわれていったのである。ところが，古くから伝えられたこのようなサルの黒焼の使用方法についての口承を調査してみると，今日までの調査では村々によってのみ方の違いがある。サルの小腸を干したヒヤクヒロについても，吉野谷村瀬波地区ではこれを湯づけにして煎じてのむとされているが，同村中宮地区ではこのヒヤクヒロを妊婦の腹巻にまきこんで安産のまじないにすると伝えられている。サルの毛が，万病に効く呪術的な利用として二又地区に伝えられていることは，かつてサルが威力ある霊獣として認められていたことの残留であると考えられる。このように白山山麓帯における高令者間にみられる薬用口承自体の地域に根ざした薬用価値観にも定着現象がみられ，この伝承はこの地帯に居住してきた住民にとって自然と生物とがどのようなものとして受けとめられてきたかを知るうえでの貴重な口承資料なのである。

図5　白山山麓地帯サル薬用伝承

体の部位	状態	薬用に関する口承	効果	情報提供者		地区
				年令	性別	
頭	黒焼	粉にして水飴にまぜなめる	脳病	78	男	二又
頭	黒焼	そのままのむ	頭痛	52	男	内尾
小腸	乾燥	煎じてのむ（ヒヤクヒロ）	安産	76	男	内尾
胆嚢	乾燥	煎じてのむ	腹痛	70	男	内尾
頭	黒焼	一つ全部のむ	頭痛	70	男	杖
肉	生	煮てたべる	テンカン	68	男	瀬波
小腸	乾燥	熱い白湯にいれてのむ（ヒヤクヒロ）	安産	72	男	瀬波
胃	乾燥	ウマの胃病にのませる	胃病	72	男	瀬波
頭	黒焼	そのままのむ	婦人病 脳病	81	女	中宮
小腸	乾燥	腹巻にいれる	安産	78	女	中宮
小腸	乾燥	不明	安産	48	女	尾添
肉	生	煮てたべる	滋養	81	男	白峰

ニホンザルの捕食・薬用は，国の強力な行政施策としての鳥獣保護の線にそって姿を消すこととなったが，科学研究の進展は新たなニホンザルの科学価値を見いだした。学術研究および医学研究上の価値の発見である。医学研究のための実験動物としての利用開発が昭和20年（1945）後半から始められたのであった（宮地，1966）。

V　犀川上流域のニホンザル民間伝承にみられる地域性

以上かつて大正期から昭和30年（1955）代にわたって犀川上流域二又・倉谷地区に居住していたインフォーマントによりもたらされたニホンザルをめぐる生息域，行動，食用，薬用等の口承は人とサルのかかわりの時間的な経過としてはたかだか1世紀をこえない極めて限られた範囲内のものであるが，インフォーマントに受けつがれた古伝承を含めてニホンザルに関した民間伝承の地域性を明らかにしてくれた。幸い，「サルマツリ」という言葉を生じた湯涌地区において聞き込みをえたのでニホンザルをめぐる民間伝承に現われた二又・倉谷地区の地域性についてその特色を以下に考察する。

インフォーマントたちの生活体験のなかに出現するサルは半世紀前にさかのぼる。そしてサルの生息数も今日では正確に知ることが出来ないが，年によってその数の増減が認められ，年々その数が変動し，村落の周辺に近づいてくる時期や，離れる時期のあることが伝えられた。

先に述べたごとく，石川県下，犀川上流域もまた古くからニホンザルの捕殺をめぐって，住民の出作り生活と野生ニホンザルが拮抗関係にあったと伝えられる地域である。本論にとりあげたニホンザルをめぐる伝承ももはやこの犀川上流にかつて存在していた二又・倉谷の両村落において今では聞くことが出来ない。すなわち二又ダム工事によりこれらの村々には廃村となり人々は金沢市内，その他の地に移り住んで久しい。かつての住民の一部から聴取することのできたニホンザルをめぐる口承や伝承には，自然環境のなかでの生きものとしてのニホンザルの姿・形・行動等についての話題が食用・捕殺等に関する話題を上まわって多かった点に特色がみられる。ニホンザルに対して地域住民としての日本人が，如何なる意識をもちつづけてきたかを解明するには，動物観形成に働く人々の生活環境要因と生業や文化観，信仰の背景を明らかにしなくてはならないのであるが，自然環境の動態変遷についての調査はいまだ不充分である。自然環境の変化や住民生活の自然環境対応への変化と関係を有していると考えられるニホンザルの生態状況の変化についても種々の関き込み資料をもとに考察してみるとインフォーマントからの聴き込み情報に内在するニホンザルの環境指標動物としての位置づけは，多くの環境動態の史的変遷の解明に手がかりを与えるものといえよう。

倉谷地区での孤猿（ヒトリザル）との出合いはＹＡ氏の昭和43年（1968）の情報のみにとどまっており，これは他の白山山麓地帯のヒトリザルとの出合い時期，その場所との比較でみると，他の地区に比して新しい情報の一つであり，二又ダム完成後，住民の退去後の野生ニホンザルの動向の一端を示すものである。

図6　白山山麓孤猿出現情報

	地　帯	時期	頭数	場　所	情報提供者	年令	職　業
1	湯　涌	1942	1	茅　原	浅田　文吉	55	公務員
2	二又・倉谷	1968	1	倉　谷	山本　長松	61	林　業
3	内　尾	1975	1	県　道	白座　定義	74	農　業
4	瀬　波	1925	3	瀬　波	橋本　政一	55	土　木
5	左　礫	1926	2	左　礫	中田市太郎	84	農　業
6	尾　添	1921	1	手取川	吉谷　兎吉	65	公務員

1976年，湯涌地区（現金沢市内）において収録した「サルマツリ」という言葉は，今日その意味内容が伝えられていないが，湯涌温泉に湯治のために毎年5月頃になると倉谷あたりから山をおりてくる人たちをさして云ったと伝えられる。これは地域住民間にしか通じなかった言葉ではあるが，サルという言葉に悔蔑観を意識させ，都会文化に対比した田舎的存在を意識してつくり出された観念の産物としてとらえてみる必要がある。すでに，1973年に「民間伝承におけるニホンザル―尾添川にそって―」において明らかにしたニホンザルと山村生活住民との間にいかなる動物観念が生まれ，伝えられたかを，この二又・倉谷地区における伝承内容を分析することにより，一そう白山山麓帯に形成されたニホンザルに係る動物観ならびに自然観の特色を抽出することが可能となるものと考えられるのである。

以上，本論では二又地区と倉谷地区におけるインフォーマントの口承に継承されていた古くからの人々の伝承を収録したのであるが，サルに関する伝承やサルという言葉の存在についてみても，二又・倉谷両地区でサルビヨリという天気予兆の言葉がみあたらないし，二又では，「サル」のかわりの言葉を使っておらず，白山山麓の地の地区でのエテコ・ヤエンボ・ヤマノタイショウ・オヤジなど耳にしてはいても，ヤエン・サル以外はほとんど使用したことがない。吉野谷村中宮での「カブラ」という用例は知られていなかった。すなわちサルに関する読み替えの語彙は少ないといわざるをえない。これは集団社会間におけるサルへの関心度の違いとも関係があると考えている。

「サル年うまれは木登り上手」という口承や，くくりザルのことを「ガラガラ」と二又地区では呼んでいた。インフォーマントたちは出作り耕作と炭焼が主な仕事であり，村から5～6km の所でソバ・アズキ等を作っていたのであり，ニホンザルについてその生態行動や，形態についての関心も強く，サルのシリダコの外側は固いが内はやわらかい，冬毛・夏毛のはえかわりがある等，いずれもニホンザルについて良く知っていた。サルと天候については前述のごとくサルが村へ近づかないのは山に食べものが多いからであり，サルが里へ来る時は雪が多くサルの移動と山の木の実のなり方，降雪を関連づけた。住民たちがサルを如何に知っていたか，サルの自然認知についての聞き込みを更に進めたいと考えている。また，サルの毛については，二又，地区においてはインフォーマントの父親からの聞き伝えとして，「サルの毛3本が呪(まじな)いに使われ，ハレモノが出来ても，体の悪い時でも使われた」ことを伝えている。この種の伝承は，その発生時期を明らかにすることは出来ないが，かなり以前からニホンザルの自然生活やその集団生活の知恵などについてもの高い評価が根底にあったのと考えたい。今日なおインフォーマントの一人は，かつての居住区の附近で狩猟を行ない，野生生物に関する豊かな情報を有していた。このような事例の示すごとく，ニホンザルに関する民間伝承は，地域社会の自然環境や生物とかかわりあった諸関係のなかから生じていると考えられる点が多いのである。

湯涌地区の聞込みは昭和51年（1976）湯涌小学校においてY氏，I氏，A氏，KA氏，SI氏の5氏から聴取を行なった。KA氏によれば，今日ではサルたちは，「絶対に打たれないと思っていて山で会うとむこうから近づいてくる」「湯涌地区には，近年サルをみることはない」しかしインフォーマントのサルへの感情は良いとはいえなかった。KA氏同様にサルのことは，「サルのガキ」と呼び，サルを悪(わる)さをするものとしている。さらにKA氏はサルという言葉が，狩猟の際使用できないというタブーがあることを河内村の者たちと猟をするようになってから知った。次にA氏は，昭和18年（1943年）に石川郡茅原(ちはら)にサルが出現し，子供たちが，木に登ったサルに石をなげたり，田へ入ったとさわいだことを記憶していたが，当時にもサルは珍しい存在となってしまっていたのである。また，SI氏は，犀川上流に，昭和51年（1976）4月にサルのムレを発見しており，そのムレが小さい点を指摘したが，サルのことを「エテコ」と呼んでいたこと，猟師たちが，サルという言葉を嫌っていたとのべている。「サルマツリ」は同氏の発言にみられたものであった。また同氏によれば，「白山ザルは

小さい。たきものを取りに山へ入るとサルが杉の木の枝をおとしたりした。サルを殺すとそのたたりで顔が悪くなる。サルの肉はトリ肉のようでうまい」ということであり，さらに同氏はニホンザルの生息にくわしく，近年サルが犀川域に近づいてきていること，人をこわがらなくなっていること，横谷（富山県境）で昭和46年（1971）に30頭ほど見た等の情報を提供している。また，Y氏は，昔，サル廻しが湯涌へやってきたが，厩猿との関係はみられなかった。湯涌地区では，現在，小学校横に昔の馬小屋を復現していたが，サルとの関係は何もみられなかったし，サルにまつわる民間信仰も全く見られなかったと述べている。だが同地区では，祭礼幟の下にくくりザルがつけられていたのである。Y氏は「10年前にはサルをしばしば見かけた。とくに山で小便をしているとサルが声を出してなき，コラッと叫ぶと木をゆすったが逃げなかった。ところが鉄砲をとりに行くと逃げた。サルのことをヤエンボーと云ったがエテコとは云わなかった。サルが縁起の悪い動物ということは全く知らなかった」等述べている。

このように，二又・倉谷地区および，湯涌地区にそれぞれのインフォーマントたちの口承を丹念に収録してみると，彼等の口承の成立背景となった自然および社会環境のなかでのサルの生息と人々との出合いにみられた生活史はほとんどが大正期から昭和初年にいたるものであった。また，ニホンザルは昭和10年代（1935）においても個体数は20頭をこえている場合が少なかったし，サルのムレとの出合い頻度も高いとはいえない。とくに戦後(昭和20年以降)のサルとの出合いはほとんどが1～2頭でしかなかった。

ニホンザルの生息環境をめぐる地域伝承の収録は，民族学研究の立場からも人獣交渉資料として求められるものである。犀川上流域に居住し，ニホンザルについての関心を強くいだいていたインフォーマントたちの提供した情報により明らかになってきたことは，サルの食用をめぐっての具体的な実態が語られ，基盤にある動物観がどのようなものであったかという点である。また，「サル」という言葉を嫌う禁語用例など，とっくに都会生活において忘れ去られたものでありながら，一度山間部へ戻り，狩猟体験がはじまるや，ただちに禁忌に巻きこまれるという事実が示す，伝承の増副現象には注目せざるをえないであろう。ニホンザルに対しての自然知識は，サルの行動への関心が主となって導き出されたものであるが，伝説的な口承などは，個人の体験，青年期の職業，仕事の場所によって著しく異なるし，知られている事象にも個体差があるといえよう。二又地区に関しては，ニホンザルがゲーム・レクリェーション化したハンティングの対象となっていたこと，サル肉への関心が高い生活者を有していたことや，食肉伝承がのこされていた点，さらに薬用に関しては，その利用方法については，あまり強い関心に至ってはいなかった点に特色をみい出すことができるのである。

ニホンザルの野生生活に関する知識というものは，必ずしも一般人のものといいがたいが，出作り以来の伝統的な憎しみの感情は，急激に喪失されていると考えられる理由は，昭和初期のサルの減少と生息域の変化が，同時期の農林施業といかにかかわるかに今後の調査がむけられ，それから引出された住民の生活の変化と野生生物との対応のうちに求めざるをえないのである。昭和38年（1963）の廃村・離村がもたらした物・心両面の著しい生活変化のなかに，野生生物と接した過去の自然観の消滅が含まれていることは，極めて残念なことである。自然生物としてのサルの理解は，生態学研究によるニホンザルの自然社会の解明とそれがマスコミにのって大衆社会に伝えられたことによるものが大きいのであるが，同地区住民が昭和38年(1963)以後の離村により，サルとのかかわりを全く失なってしまった現在，口承はすべてそれ以前に体得したか，伝承として受け継がれてきたものである。

とくにニホンザルが，近年しばしば，同地区に出現している事実が明らかとなっていることからも，ニホンザルの生息域の回復現象がそこにみられるとインフォーマントたちは考えている。ニホンザルのムレの移動コースが，あらたにこの地区を含むにいたったものと考えられるが，自然利用に関して

も人間の側の見捨てた自然，電源開発利用にまきこまれた地区住民の自然観がいかに今後大きく変化して行こうとしているかに関心をもたざるをえない。ニホンザルにかかわる過去の伝承がこの地区住民にどれほど強く残されていたものであったかその全貌を明らかにすることは出来ないが，すくなくとも過去においてのニホンザルとの接触，伝統的サルの除去を試みた地区住民層においてのサルに対する感情は決して，攻撃的なものではない。ニホンザルに対してこれを愛頑物とみて，餌づけによる接近のみが生物とのつき合う方法であるかの如くすすめられた接触方法は多くの野生動物保護行政に関しても疑問をなげかけているといえよう。地域住民各層にわたる野生動物に対する感情はさらに深くほりさげ，明らかにしたいと考えるが，日本社会の近代化，急速な社会構造の変化と往民の生活改革は自然観の伝承のどの部分を切り捨てざるをえなかったのか，サルを追うことに対する抵抗観についてその本質を明らかにせねばならなかったのである。白山地域のニホンザルの分布と自然環境との関係の伝承面からの見直しはこれからの調査課題なのである（増井，1977）。

本論は，白山自然保護センター調査研究委員会人文班「白山山麓におけるヒトと生物・自然とのかかわりをめぐる人文科学研究」の一環をなすものであり，委託研究費によった。本論調査聞き込みには，水野昭憲氏〔白山自然保護センター〕松山利夫氏〔国立民族学博物館〕山本重孝氏〔吉野谷村〕の方々の協力をえた。これ等のすべてに深い感謝を申しあげる。

文　　献

千葉徳爾（1969 a）狩猟伝承，法政大学出版局
———（1969 b）狩猟伝承研究，風間書房，東京
———（1975）狩猟の中のニホンザル，モンキーNo. 143，日本モンキーセンター
中日新聞岐阜総局（1975）わが自然の仲間たち，中日新聞本社
白山学術調査団編（1970）白山の自然，石川県
広瀬　鎮（1972）漢薬とサル，モンキー No. 126，日本モンキーセンター
———（1973）サルの民間伝承，美濃民俗 No. 74
———（1976 a）石川県石川郡河内村内尾にみられたニホンザル伝承と白山山麓地域における住民の自然認識と民間伝承比較の成立，石川県白山自然保護センター研究報告　第3集，石川県
———（1976 b）ニホンザル薬用の文化史，びぞん通信 No. 44，日本美術史研究会
———（1978 a）岐阜県とサル—日本の歴史的自然環境におけるニホンザルその伝承と特色，岐阜県郷土資料研究協議会会報 No. 20，岐阜県郷土研究会
———（1978 b）ニホンザル伝承分析よりみた白山山麓住民の自然観の特色，文部省環境科学研究報告書四手井班日本の歴史的自然環境としての哺乳動物，日本モンキーセンター
———（1978 c）ニホンザル伝承分析よりみた白山山麓住民の自然観の特色，文部省環境科学研究報告
———・水野昭憲（1973）民間伝承におけるニホンザル——尾添川にそって——，白山資源調査事業　1972年度報告，石川県
———・水野礼子（1973）白山麓のニホンザル伝承2薬につかったサル1，はくさん　第1巻　第2号石川県白山自然保護センター
———・———（1975）ニホンザルの出合いにおける動物観の比較民俗学的考察，石川県白山自然保護センター研究報告第2集，石川県
堀　一郎（1953）我国民間信仰史の研究，創元社
飯田道夫（1973）猿よもやま話，評言社
石川県郷土資料館（1972）白山山麓地域民俗資料緊急調査報告，
伊沢紘生（1971）白山蛇谷一円に生息する野生ニホンザルの生態学的調査，石川県

小泉栄次郎（1921）黒焼の研究，宮沢書店
———（1961）増訂和漢薬考，南江堂
増井憲一（1977）白山地域のニホンザルの分布と保護上の問題点，にほんざる No. 3，にほんざる編集会議
宮地伝二郎（1966）サルの話，岩波書店
日本モンキーセンター（1977）自然から学ぶ，昭和51年度文部省特定研究広瀬班「教材開発研究」
尾口村史編集委員会（1978）尾口村史，尾口村
尾崎義雄（1973）のとかが四季の野生，北国新聞
桜井徳太郎（1970）日本民間信仰論

Summary

There are some interesting differenciations of the values of Nature and Animals among the residents in Hakusan area. The author collected and analyzed the thoughts of villagers and informants on the Japanese monkey and Nature in the upper basin of the Saigawa river in Ishikawa prefecture.

The analizations and classifications of informants' informations reduced some data of ecological distribution of Japanese monkey and the author could recognize some animal behaviours brought by the traditional monkeys-lores and the informations of residents.

Secondary, then the author mention how the residents would take care of the behaviours of Japanese monkey with strong interest from the old time.

And also the informants showed the life history of man connected with capturings and medical uses of Japanese monkey in Japan. Regional pharmacological uses of monkey depend on historical and cultural lives of people.

Finally, author tried to compare the locality of Japanese monkey-lores among Yuwaku, Futamata, Kuratani, and other areas.